陸奥湾周辺のイカナゴ（コウナゴ）禁漁

水産総合研究所資源管理部　部長　**伊藤　欣吾**

イカナゴ（コウナゴ）資源を回復させるため、陸奥湾周辺の漁業者が平成 25 年から禁漁（水揚げ禁止）に踏み切りました。平成 26 年以降は、水産総合研究所の調査結果等に基づき操業再開を検討することとしています。そこで、イカナゴ資源の状況を紹介します。

陸奥湾周辺のイカナゴ漁は光力利用敷網と定置網によりチリメンから大羽サイズのイカナゴ幼魚を対象に行われています。その漁獲量は中長期的に大きく変動し、その変動幅は昭和 48 年の 11,475 トンから平成 24 年の 1 トンと極めて大きくなっています（図 1）。

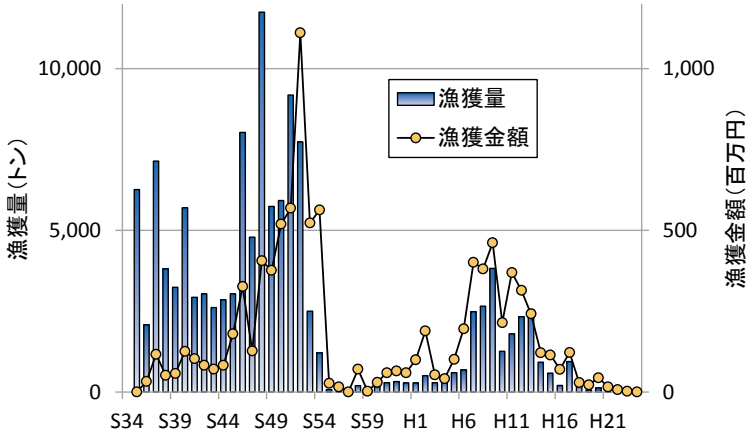

図 1　陸奥湾のイカナゴ漁獲量の推移

生態調査の結果（図 2）、湾口域に産卵場と夏眠場（砂に潜ったまま摂餌しない）が発見され、寿命は約 5 年、成熟は 2 歳魚以上と推定されました。イカナゴは陸奥湾周辺で一生を過ごすと考えられました。

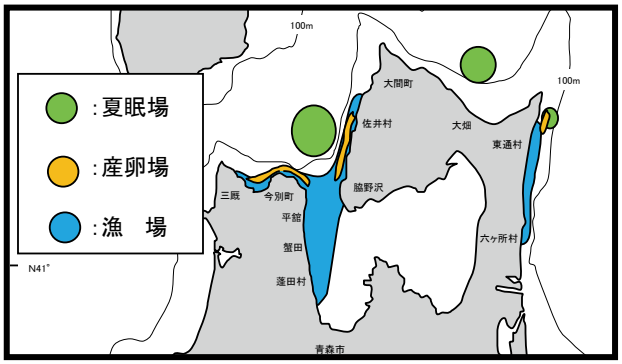

図 2　イカナゴの漁場、産卵場、夏眠場

イカナゴ資源の動向を分析するため、漁獲率、生残率、親魚数、産卵数などを計算しました。分析の結果、親魚数が 3 億尾以上で豊漁が期待でき、それ以下では期待できないことがわかりました（図 3）。親魚数は 3 億尾を下回った平成 16 年以降減少し続け、平成 24 年にはわずか 0.1 億尾となりました。

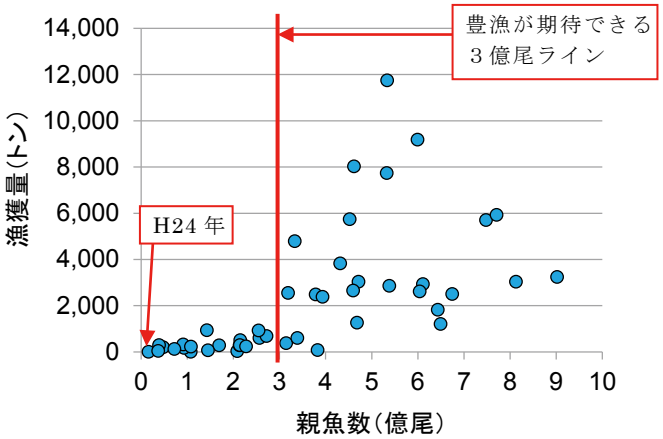

図 3　イカナゴの親魚数と漁獲量との関係

今年春の調査結果では、今シーズンのイカナゴの仔稚魚と幼魚の分布状況は極めて少なく、不漁であった前年と同程度と考えられました。今後は禁漁による効果を追跡調査していきます。